EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

えど友

EDO-TOMO

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

No.43
2008
（平成20年）
5－6

江戸東京博物館友の会会報

目次

平成20年度　定期総会のご案内 …… 1
友の会セミナー『十八代当主が語る太田道灌』…… 2
友の会セミナー『明治期の動物園と浅草花屋敷』…… 3
見学会『江戸城周辺の探訪―その3（外濠）』 …… 4
特別観覧会『天璋院篤姫展』 …… 5
江戸博クリップ『都電に乗って』 …… 5
えど友サークルだより／会議・会合日誌 …… 6
えど友プラザ『青鯨憧憬』 …… 7
『土方歳三の生地を訪ねる』…… 7
『江戸時代の八丈島と流人』…… 8
『ご先祖さん探訪ツアー』…… 8
『オタクから見た江戸』…… 9
落語で江戸散歩…②［堀の内］ …… 10
催事案内／会員優待のお知らせ …… 11～12

平成20年度　定期総会のご案内

5月23日（金）午後1時から開催
～竹内館長の記念講演を予定～

江戸東京博物館友の会は平成20年度の定期総会を来る5月23日（金）の午後1時から開催しますのでご案内いたします。

友の会は、平成13年5月に会員600名弱で発足しましたが、おかげさまでその後会員数も順調に増え、1500名を数えるまでになりました。これもひとえに会員の皆様方や江戸博のご協力の賜物と感謝申し上げます。

新年度も多彩な事業活動が予定されておりますが、会員の皆さんのご希望やご意見を取り入れ、1人でも多くの方がたの参加と協力を得て一層充実した活動を展開したいと考えています。

定期総会は会員が一堂に会する年に1度の機会で、過去1年間の活動を振り返るとともに、これからの活動について率直な意見交換を行う場でもあります。

ぜひ同封の議案書をお読みいただき、多くの会員の皆様方のご出席をお待ちしています。

開催要領は次のとおりです。

■平成20年度　友の会定期総会

開催日時：5月23日（金）
午後1時から
会場：江戸東京博物館・1階ホール

●主な議案

- 平成19年度事業報告・収支決算報告について
- 基金の創設と平成19年度剰余金処分について
- 平成20年度事業計画案と事業予算案について
- 役員の補充と選出について

■竹内館長の記念講演

総会に引き続き、午後2時45分から約1時間30分、江戸博竹内誠館長の記念講演（演題：「それぞれの明治維新」―高須四兄弟を中心に―）が予定されていますので、ご期待ください。

■懇親会

記念講演終了後、午後4時30分から館内2階のレストラン・モアで懇親会（会費500円）が開催されます。会員同士が交流し懇親を深める折角の機会です。こちらにも奮ってご参加く

会員資格継続手続きのお願い

■会員資格の有効期限は、入会の日から1年間となっています。間もなく有効期限を迎える方には「継続手続きのお願い」を郵送いたしますので、継続ご希望の場合は同封の払込用紙にて年会費の納入をお願いいたします。友の会は会員の皆さまによって支えられていますので、1人でも多くの方の継続をお待ちしています。

■継続手続きをされませんと、友の会活動への参加や会員特典を受けられなくなりますので、ご注意ください。

第64回　江戸東京博物館友の会セミナー（2008/2/23）

「十八代当主が語る太田道灌」

講師　太田資暁さん（太田道灌公墓前祭実行委員会会長）

道灌が生きた頃の関東

太田道灌は徳川家康より150年ほど前の室町時代中期の人です。その頃の関東は政権が鎌倉（堀越）公方と古河公方の2つに分かれていました。室町幕府は鎌倉公方の下に上杉家を関東管領として配し、両政権は荒川と利根川を挟んで壮烈な戦いを繰り返していました。すべて人事の不適合に始まる同族の争いです。上杉一族は館のあった鎌倉の地名により、山内上杉（管領家）、扇谷上杉などと呼ばれます。道灌の父道真は扇谷家の家宰（家老）でした。父の後を道灌が継ぎます。

長尾景春の乱と道灌謀殺

上杉管領家では家宰は長尾家でしたが、家宰になれなかった嫡男景春が鉢形城にこもり、古河公方と組んで反乱を起こします。それまで鎌倉公方と上杉方がおさえていた相模、武蔵の国人領主がいっせいに長尾景春に味方しました。道灌の軍は江戸を出て石神井にいる豊島泰経と戦い、後に山本勘助がまねたという足軽戦法で道灌は圧勝します。有名な江古田・沼袋の合戦です。泰経は逃げのびますが、石神井城に残された泰経の部下や娘の照姫が三宝寺池に身を投げ自害しました。練馬区ではこれを偲んで照姫まつりを行っています。

景春の大乱で関東を縦横無尽に駆け巡り、30数回、連戦連勝した道灌は名声を一身に集めます。京からの文化人も主人の定正を素通り、歌人でもあった道灌のところへ行きました。こうした道灌をねたみ、猜疑心を深めていった主人の定正に「道灌に寝首をかかれる」とあおったのが管領家の顕定でした。道灌状に見るごとく、歯に衣をきせず道灌は顕定に諫言もしていますし、また景春は管領山内上杉家の人間でしたから、道灌が景春に勝った地は山内上杉家からすべて扇谷上杉家のものになったのですから、顕定にすれば道灌が憎かったのだと思います。

軽々に顕定の言葉を信じた定正は江戸城にいる道灌を粕屋（伊勢原市）の館の新築祝いに招き、風呂から出たところを殺させます。そのとき道灌は「当方（上杉家）滅亡」と言い残して息を引き取りました。道灌が亡くなって1年足らず、顕定と定正は戦いを始めます。これに北条早雲と古河公方がからみ、関東は大混乱、荒廃をきわめました。道灌が予言した通り、扇谷上杉家は川越夜戦で北条軍と戦い滅亡します。ちなみに道灌と早雲は同じ歳でした。

道灌紀行

判官びいきの江戸の人々は非業の死をとげた道灌を愛惜しました。関東では道灌の像が方々に建てられています。道灌が殺された伊勢原市をはじめ、父道真が晩年に住んだ越生の山奥にある竜穏寺、道灌の築いた岩槻城があった岩槻区役所前や、同区の芳林寺、熱川温泉、新宿区中央公園のほか、道灌山に江戸城の出城があった日暮里の駅前など数多くあります。川越市が昭和47年（1972）、川越城を築いた道灌の像を市役所前に建てたとき、上杉家から抗議がありました。城は上杉家が命じて造らせたのだから道灌の像であるのはおかしいという理由だったとか。500年前の管領家と道灌の関係を彷彿とさせる出来事です。道灌像の中で一番の出来は、有楽町の東京フォーラムにある朝倉文夫先生の作られた道灌像だと思います。

最近『道灌紀行』という本を尾崎孝さんが出されました。写真が豊富で文章も達者です。その中からいくつか紹介します。まずは道灌の造った江戸城です。城は北条氏と徳川幕府によりすっかり造りかえられましたが、乾濠（三日月濠）と道灌濠だけはかつての姿を残しているといわれます。ただし道灌濠は吹上御所の方にあって行くことはできません。そのほか長尾景春の乱が始まる寄居町の鉢形城跡や、豊島一族が争った江古田・沼袋合戦の碑、道灌の亡骸が荼毘に付されたところで墓がある伊勢原市の洞昌院があります。洞昌院では毎年命日である7月26日の直近の日曜日に法要が行われ、市は10月の道灌まつりで賑わいます（近くには家来たちの七人塚もある）。また北区の静勝寺には道服姿で手に払子を持った道灌の木造（命日の26日に毎月開帳）もあります。

道灌後の太田家

江戸系と岩槻系に分かれます。江戸系では、道灌から五代目にお勝（英勝院）という女子がいて家康の最後の側室になりました。家康は実子を亡くしたお勝を第11子頼房（水戸徳川家初代）の養母にします。その縁でお勝の甥である正重が幼い頼房を補佐して家老となり、以後、太田家は代々水戸家の家老職を勤めました。その末端に私がいるというわけです。正重の弟の資宗は非常に有能で、幕府の系図編纂責任者とか浜松城主になっています。これを掛川系と言います。岩槻系では、道灌からやはり五代目に戦い上手で道灌の生まれ変わりといわれた名将太田資正が出ています。しかし道灌から江戸時代までの150年間は不明な点も多く、我々子孫の間では直系とか当主という言葉は正式には使っておりません。

【記録】文：広報部会・大野晴美
写真：同・佐藤幸彦

第65回 江戸東京博物館友の会セミナー（2008/3/22）

「明治期の動物園と浅草花屋敷」

講師　小沢詠美子さん（成城大学非常勤講師）

浅草の町おこし事業だった花屋敷

浅草花屋敷について資料で確認できる一番古い年は文政12年(1829)です。その年、初代森田六三郎の父親が浅草寺の境内で菜飯茶屋を始めたいと寺に申請をし、その茶屋の庭を初代森田六三郎が造りました。この初代六三郎という人は、江戸では非常に有名な植木屋で、設計・材料の調達・変わり朝顔の栽培などさまざまなことを行う総合園芸プロデューサーとしてマルチな才能をもつ植木屋だったようです。

やがて、六三郎は、嘉永3年(1850)に父親の菜飯茶屋を引き継ぎます。その際庭を広くして庭を楽しみながら料理を食べるという植木茶屋にしたいと浅草寺に申請し、嘉永6年(1853)に「花屋敷」とを名のり始めます。当時の浮世絵から、小山・池・四季おりおりの花木・お休み処・茶屋である新昇亭などの様子がわかります。

ところで、なぜこの時期に花屋敷を造ったのでしょうか？　実は、幕末のころの浅草は大変寂れていました。天保の改革により芝居小屋が猿若町に移動し、人々は浅草を通りぬけて猿若町に行ってしまうようになりました。また、人々の行動範囲が広がり、浅草を通りすぎて隅田川を渡り名所旧跡を求めて本所深川方面まで行ってしまい、人々が浅草で足を止めなくなったため寂れてきたのです。その状況を心配したのが浅草寺の最高責任者であった輪王寺宮です。輪王寺宮は六三郎と相談をし、浅草に人々が集まるような名所、遊興の場を作って浅草を盛りたてようと、今でいう町おこしを企てたと考えられます。花屋敷は当初から町おこしという宿命を背負った場所でした。

二代目への引き継ぎと動物の登場

花屋敷にいつから動物が登場するのか正確な記録はありませんが、万延元年(1860)に浅草花屋敷を訪れたイギリス人園芸家ロバート・フォーチュンの記録によると、「緑色のハト、斑点のついたカラス、大鷲、金銀の羽をもった雉、うさぎ、りす、等々」がいたことがわかります。この年、初代六三郎が亡くなり、二代目に引き継がれた年ですので、それをきっかけに優秀な先代に対し二代目としてのオリジナリティーを出すために動物を登場させたのではないかと推測されます。

その後、花屋敷はその二代目から婿養子の三代目に引き継がれるわけですが、三代目六三郎は面白い経歴の持ち主でもありました。もとは、旧幕臣の望月源一郎という下級武士でしたが、徳川幕府から明治への時代の変遷期に、自分は一市井の人間として人生をまっとうしたいとあえて植木屋に婿入りし花屋敷を継いだようなのです。

経営難の明治時代と東京府の思惑

江戸時代は輪王寺宮の保護を受け地代が安かったのですが、明治時代になると、土地は政府に接収され地主は東京府になってしまいます。地代が一気に上昇し、経営が困難になります。

明治5年(1872)、明治政府は博物館構想を打ち出しました。これは前年に海外視察に派遣された岩倉具視一行が海外の博物館に感銘をうけたことによります。植物や鉱物・動物を研究、陳列し、人々に知識を得てもらおうという構想でした。その推進の急先鋒だったのが大久保利通です。利通は博物館が国家的情報戦略のために担う重要性に気がついたのです。明治15年(1882)には今の上野動物園が開園されるのですが、開園当時は国産の動物だけしかいないという状況でした。西南戦争への支出、大久保利通の暗殺により、支援が減ってしまったのです。

明治政府の国立動物園の挫折に対し、東京府は花屋敷を高く評価をしていました。当時の浅草は、浅草6区に大道芸人や見世物小屋などが集まり華やかであるのに対し、花屋敷のある浅草5区は寂れ区内の地代収集が滞っていました。そこで、東京府は、浅草5区の経済復興のために花屋敷を町おこしの中心にしようとするのです。実は六三郎としては動物を止め、花屋敷を植物学の研究者や学生が学べるような本格的な植物園にしたいという計画をもっていました。しかし、それではもうからないとみた東京府が、なんらかの圧力をかけ動物園色を強めるリニューアルをさせたようなのです。結果的にはそれで地代は値下げされ東京府の協力を得ることになるわけですが、明治19年(1886)、森田六三郎一家は山本金蔵という人物に全ての権利を譲ってしまいます。おそらく資金繰りに困ったものと考えられます。しかし、その後も花屋敷は、当時の上野動物園よりも珍しい動物を保有する理想の動物園として明治政府からも東京府からも期待されました。正面の看板に象・虎などをとりあげ、園内には数々の鳥かご・動物小屋があり、動物園として注目を集め続けました。

このように、浅草花屋敷は、開園当時の幕末は寂れた浅草一帯の復興、明治には浅草5区を立て直すという東京府の都市計画に組み込まれていました。さらに、明治時代の博物館構想の一環としての国威高揚の役割までも担わされていた重要な場所だったのです。

【記録】文・写真：広報部会・深尾恵美子

江戸東京博物館友の会　見学会（2008/3/29）

江戸城周辺の探訪 ―その3 外濠

▲外濠公園から見る外濠と桜

聖橋から水道歴史館、後楽園へ

江戸城周辺探訪の３回目は桜の見頃を迎えた３月29日(土)に催されました。御茶ノ水駅聖橋口には今回も大勢の人が集まり、コースの途中、満開の桜が見られるのではと心ときめかせながら順次出発しました。最初の聖橋は船から見上げた時に美しく見えるようデザインされたといいます。神田川とJR線路を合わせて外濠(仙台堀)で、橋から見るとスケールの大きさが伺われます。

橋の北側右手には湯島聖堂、左手には東京医科歯科大学などがあり近代教育発祥の地の碑があります。神田川の北岸に沿って行き、東京メトロの御茶ノ水駅からお茶の水橋を過ぎ川岸を進みます。この辺りの土手には獅子文六の小説『自由学校』の主人公が住んでいたとの説明を聞きながら東京都水道歴史館へ向かいました。

歴史館の２階の展示室では「江戸っ子は、水道の水で産湯をつかい…」といわれる江戸っ子の使った水道＝上水のあゆみを知ることができ、屋外には神田上水石樋(とい)が復元されています。またの機会にゆっくり訪れて見たい所です。歴史館の隣、本郷給水所公苑を経て元町公園へ。このあたりにあったという高林寺の境内には名水が湧き（御茶ノ水の由来)、その井戸が江戸図屏風(びょうぶ)に描かれています。

水道橋交差点を左折すると神田上水掛樋跡の碑があります。水道橋の地名は神田川をこの掛樋で渡ったことに由来します。講武所跡を南に見て西へ向かいます。松平讃岐守邸跡近くにはしだれ桜が咲いており川沿いの桜を楽しみながら歩きました。少し風はありましたが、小気味よく感じられます。小石川橋を渡って後楽園へ向かいます。

▲後楽園への道も桜がきれい

小石川後楽園は水戸徳川家ゆかりの庭園で特別史跡及び特別名勝に指定、正門は現在閉じられていますが木製で荘厳さを感じます。桜を見ながら西側の遊歩道を進みますと、展示室があります。水戸屋敷から出土した石製品や水戸家の系図が展示されています。更に進むと後楽園入口に出ます。花見客ですごい人、中へ入るのはあきらめ東側へ。築地塀の石垣が見られますが、江戸城外堀石垣を再利用したものとのこと、石積みを勉強しました。

神楽坂と牛込門

後楽園を後にして飯田橋へ。軽子坂へ踏み入れます。案内標識によると軽子とは軽籠(かるこ)持の略称です。今の飯田濠にかつて船着場があり、船荷を軽籠(縄で編んだもっこ）に入れ江戸市中に運搬することを職業とした人がこの辺りに多く住んでいたことからその名がつけられたとあります。静かな石畳の続くかくれんぼ横丁に入ると倉本聰脚本のテレビドラマ「拝啓、父上様」の世界。更に進むと神楽坂通りに出て善国寺に着きました。徳川家康により創建され、「神楽坂の毘沙門さま」として信仰されている毘沙門天立像は木彫で像高30㎝、普段は御簾(みす)がかかっています。ぜひ見てみたいものです。神楽坂通りを飯田橋駅の方へ向かいます。人通りが多く行列のできている店も見られました。駅西口を過ぎ牛込橋を渡った所に牛込見附跡がありました。牛込門の石垣が残っており、江戸三十六見附の中で最も完全な形で残っていると言われます。築造寛永13年(1636)というから約370年前のものです。石垣の組み方に美を感じます。

桜満開の外濠公園と亀ヶ岡八幡宮

間もなく外濠公園に入りました。飯田橋から四谷までの外濠沿いに作られた散策路で、今まさに満開の桜並木の下を歩きました。近くに大学などが多いせいか、若い人たちが車座になり花見を楽しんでいました。学生相手なのかビールを安く売っているところもあり見学会でなければ一緒に飲みたいところ…。外濠公園を出て新見附橋を渡り外堀に沿ってしばらく歩きます。桜並木は続いており白っぽい花の大島桜も見られます。しばらく行くと定火消発祥の地の碑が見えました。定火消は、明暦３年(1657)の「明暦の大火」で江戸の大半が焼失、その翌年の万治元年(1658)に幕府が創設。この地に初めて火消しの常駐する場所がつくられました。

次に向かったのが市ヶ谷八幡宮。正面は急な階段、左手は急な坂。迷わず坂を選びましたが、私にとっては息の上がる坂でした。鎌倉の鶴ヶ岡に対し亀ヶ岡八幡宮とも言われ銅鳥居は有形文化財に指定されています。この社の西側は尾張徳川家邸跡で今は防衛省になっています。帰りは急な階段を下り、解散場所である市ヶ谷駅近くの市ヶ谷御門（市ヶ谷見附）に着きました。

今回の参加者は約160名、歴史を学び、花見を楽しみ、ウォーキングを楽しみました。江戸城周辺探訪もあと２回とか、企画、案内の方々に感謝し、次回もぜひ参加したいと思いました。

【報告】文・写真：会員・土井信明

江戸東京博物館友の会特別観覧会
(2008/2/22)

2008年NHK大河ドラマ特別展
「天璋院篤姫展」

江戸博では、2月19日から4月6日まで、NHK大河ドラマ特別展「天璋院篤姫展」が開催されました。2月22日(金)には友の会会員を対象にした特別観覧会が開かれ、約170名の会員が集まりました。

特別展は6部構成になっており、プロローグの「篤姫のふるさと薩摩」から始まり、篤姫が御台所候補となり、6年間の長い道のりを経て、御台所に登りつめたものの、わずか1年7ヵ月で未亡人となり、やがて幕府の瓦解と徳川家存続のために苦悩しながら、明治を迎え、永の棲家(すみか)となった千駄ヶ谷邸で明治16年(1883)に生涯を閉じるまでの篤姫の波乱に満ちた人生の軌跡を追っています。

最初に岡本純子学芸員の見所の解説を聞いた後、会場に入りました。幕臣川村帰元の息子清雄の油絵「天璋院肖像画」を見て進みますと、婚礼行列の先頭を飾ったという見事な貝合道具が眼に入ります。貝の内側にはられた金ぱくの上に、鮮やかな絵が描かれています。

私にとって印象的だった展示について、少々書かせていただきます。島津斉彬をはじめとして諸侯の書簡が展示されていましたが、口語訳が付けらされていました。古文書の読めない私でも、字体を味わいながら文面を理解でき、この様な試みをしてくださった学芸員に感謝いたしました。島津斉彬の書簡の中には、徳川慶喜擁立のためだけの政略結婚ではなく、家定公側が島津家の姫を望まれたことや、家定公との夫婦和合や公子誕生を待ちたいという親心が書かれた手紙もあり、心温まる思いがしました。

「和宮御側日記」では、大奥だけではなく表に対しても影響力を持っていた篤姫の姿が書かれており、複数の「天璋院書状」は家茂公を気遣う心情や幕府瓦解の中で徳川家存続を願い苦悩しながらたくましく成長していく篤姫の姿が読み取れます。

絢爛(けんらん)豪華な大奥の生活をしのばせるはずの篤姫の衣装は、意外に地味で落ち着いた色調のものばかりでしたが、明治維新後、解雇されたり、生活に困窮した元奥女中の救済のために、華やかな衣装を下げ渡したのではないかと推測しました。病弱な人物として後世に伝えられている家定公は、肖像画で見る限り少々ひげの濃い目元のきりりとした健康そうな姿で描かれており、家定公筆の「松図」は、独創的な構図の松を力強い筆致で描いており、これまでと異なる人物像を感じました。「徳川家茂肖像画写真」では、筒袖陣羽織姿に動きのあるポーズをとっている斬新的な構図の肖像画で興味深いものでした。

大河ドラマでは、大久保利通や西郷隆盛らの活躍の中で埋もれてしまった小松帯刀(たてわき)が生き生きと登場していますが、彼が書いた薩長同盟覚書写と肖像写真が展示されていて、誠実そうな瞳が印象的でした。友の会会員だけの静かな会場で心行くまで感動できた特別観覧会でした。

【取材】文・写真：会員・高澤美恵子

江戸博クリップ

都電に乗って

学芸員　沓沢博行

大学に通っていた頃、近くを走っていた都電によく乗っていました。いろんな交通手段がある今となっては、別段速くもないし、行ける場所も限られている正直微妙な乗り物です。でも、何だか雰囲気が好きで、機会を見つけては都電に乗って、ゆっくりと流れる車窓からの景色を楽しんでおりました。

現在、江戸博の3階ひろばには都電4000形電車の台車が展示してあります。大正時代から戦後すぐにかけて製造されたこの車両は、昭和40年代までは都内のあちこちで走っていました。しかし、路線が次々と廃線となる中で役目を終えて廃車となり、どうやらもう残っている保存車両もないようです。おそらく、この台車は4000形電車の面影を伝える数少ない資料の一つなのでしょう。わずか40年前まで現役だったものがほとんど残っていない。江戸時代のものよりも、こうした近代の「当たり前」にあったものの方が、かえって残らないのかもしれません。

こんな現代の移り変わりの速さを思うと、資料を後世に伝えていくという博物館の役割が、確かに必要なものなのだと感じます。そして同時に、都電の中で過ごすゆるやかな時間を大切にしたいと思うのです。

◆このコラムは江戸博の学芸員や司書など館職員の方に執筆をお願いしています。

えど友

サークルだより

◎活動概況

◆**落語と講談を楽しむ会**：2月26日(火)江戸博会議室で次回・次々回散策関連の落語「三軒長屋」、「阿武松」のビデオを鑑賞した。参加者26名。3月25日(火)浦安駅から浦安市郷土博物館までを散策した。途中、山本周五郎『青べか物語』ゆかりの船宿や市指定有形文化財の「旧宇田川家」などを見学したが、この旧民家の造りから落語「引越しの夢」を思い起こしたのはさすが落語好きのサークル。博物館では同市堀江町から移築復元された三軒長屋（江戸時代末期の建築と推定）などを見学したが、東京近辺では江戸時代の長屋の実物が現存しているのはまれなことだそうで、一同落語「三軒長屋」への思いを深くした。参加者25名。

◆**藩史研究会**：2月8日(金)「飯田藩」特に堀家藩主の歴史、藩政の方針などについて大渡眞司さんが研究発表。参加者23名。3月14日(金)昨年9月小安洋子さんの「近江彦根藩」研究発表を受けて、藩主井伊家の江戸菩提寺「豪徳寺」および関連の世田谷城址公園、世田谷区立郷土資料館、松陰神社などを訪れた。参加者17名。

◆**古文書で『八丈実記』を読む会**：2月14日(木)、2月22日(金)、3月13日(木)、3月28日(金)に例会を開催。参加者は各9名、10名、9名、8名。

◆**江戸御府内八十八ヵ所をめぐる会**：降雪のため延期されていた第8回（「第25番長楽寺」(日野市程久保)とオプションの「土方歳三資料館」「石田寺」など）の2度目が2月17日(日)に行われた。参加者は5名。第9回として2月28日(木)と3月2日(日)に「第76番金剛院」(豊島区長崎)など2ヵ所をめぐった。参加者は各22名、12名。また、第10回として3月27日(木)と4月6日(日)に「第52番観音寺」(新宿区西早稲田)など6ヵ所をめぐった。参加者は各16名、18名。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しています。奮ってご参加ください。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また新しいサークルの立ち上げ希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先　〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局　Tel.03-3626-9910

原稿を募集します

会員の投稿欄「えど友プラザ」への原稿を募集しています。戦前戦後の思い出、名所めぐりの感想、趣味や所属サークルのできごと、あるいは東京や江戸に関することなどを1000字程度にまとめて事務局宛お送りください。採用分については記念品を差し上げます。なお、原稿はお返ししません。

会議・会合日誌

2008/2～2008/3

◆**役員会**

2月13日(水)15時開催。会員からの意見・要望について20年度計画の中で検討してみることになった。会長より、江戸博から古文書史料活字化について友の会の力を借りたいという話があったとの報告があった。20年度の基本方針と総会用資料について話し合った。方針については、次回までに各自で考えてくることになった。資料は各部会で検討して次回に持ち寄ることとした。出席者10名。

3月12日(水)17時開催。懸案事項20年度基本方針と総会の資料については次回最終調整することになった。館側からの古文書活字化については「八丈実記」サークルに話を持ちかけることになった。出席者10名。

◆**事業部会**

2月7日(木)17時開催。1月のセミナー関係の報告があった。2月と3月の計画および20年度の事業計画について話し合った。出席者18名。

3月6日(木)17時開催。新部会員が2名紹介された。セミナー関係の出席者が非常に多く満席であるとの報告があった。観覧会では舞台事務室からのクレームもあり使用時間届出手続きを規定どおり行うことにした。当面の事業計画・担当者などを決めた。出席者14名。

◆**広報部会**

2月15日(金)13時開催。故大石部会長の後任に佐藤氏が決まった。新部会員が1名入部した。『えど友』43号の内容、スケジュールなどについて話し合った。次号掲載のセミナー、観覧会などの取材担当を決めた。『江戸東京学事典』購入の要望があった。「えど友Web版」(友の会ホームページ)は個人のパソコンで作成、保存されているので、会としてデータ保存用にパソコンを購入するよう手配を進めることになった。出席者12名。

3月21日(金)13時開催。『えど友』43号のスケジュールを1週間早めることとした。『えど友』44号掲載記事の執筆者等を決めた。パソコン購入について機種などの仕様を決めた。20年度の計画を話し合った。出席者11名。

◆**総務部会**

2月27日(水)13時開催。発送業務を行った。総会に向けて、昨年度の資料に基づいて当日までの日程を検討した。備品などの在庫チェックをした。観覧会、その他の催事の担当者を決めた。出席者14名。

◆**3部会合同会議**

2月13日(水)16時開催。各部会間の交流をはかった。出席者22名。

えど友プラス

友の会 会員の投稿欄

青鱚憧憬

寺島　玄

かって、八十八夜の頃になると、東京湾奥の河口に近い浅場の砂泥地に、1尺にもなる青鱚が産卵に寄ってきた。

青鱚は目が良く、俊敏だ。2mほど先で、頭を出している好餌の砂イソメを見つけると、いっきに食らいつく。イソメが穴に逃げようとすると、体をねじらせて引きずり出し、瞬時に吸い込み、はつらつ清新な流線型の体をいかして疾走する。その間わずか2、3秒。道糸がうなるほど引きは強いが、魚信は微細で、かすかな糸の不自然な動きをとらえ鈎をあわさなければならなず、その難しさは「第六感の釣り」(『青鱚釣秘傳』村上静人)とも称された。

浅場をすみかとする青鱚は、鳥の脅威からか、警戒心が強く、かすかな音や影の動きで散ってしまい、影や音の立つ船釣りで狙うことは難しい。型を見たければ、青鱚に通じた船頭を雇い、夜中のうちに釣場に着いて、自分の背丈ほどの脚立を組んで乗り、深閑静寂のなか、ひとり暁を待たねばならない。やがて空が白みはじめ、朝霧に包まれる海へ仕掛けを投じ、はじめて魚信を待つ。その瞬間は千両の値に価するといわれた。

青鱚の生息は江戸湾に限られていたわけではないのに、竿をはじめ脚立や長びくなど専門の道具をあつらえ、青鱚を狙う釣は江戸前に限られていたようだ。釣り本の嚆矢『何羨録』をはじめ幸田露伴、佐藤垢石、先代金馬が江戸前の釣りを綴った名作をたどると青鱚の扱いが実に大きいことに驚かされる。そして「青鱚釣り」が江戸前釣り師たちのステイタスであり、憧憬の的であったように思えて来る。そう思うと「青鱚」を体感したくなる。

だが、海は汚れ、埋立てられて、東京湾の初夏の風物詩だった青鱚の脚立釣りは昭和43年(1968)、内房蔵波海岸を最後に姿を消した。そして、昭和51年(1976)、稲毛浜で漁網にかかったのを最後に、東京湾で青鱚の生息を示す公式の記録はない。

奇しくも私が中学生になり釣りをはじめるに際し買った『関東の磯・投げ釣り場』(敏陰敬三著、昭和57年改訂、つり人社)は、おそらく東京湾の青鱚釣りに関する最後の案内書(ガイド)ではないかと思われる。著者は最後の公式生息記録から6年がたちなお改訂版に青鱚を残した。敏陰氏の青鱚への思いが伝わってくる。

去年、敏陰本を手に大貫から竹岡にかけて「青鱚釣行」をした。型を見ることはできなかったが「青鱚？まだいるんじゃないか。30～40年、潮のまわり加減でこないだけだよ」。そんな声を土地の漁師から少なからず聞いた。

今年も八十八夜の頃、青鱚を狙いに行こう。

土方歳三の生地を訪ねる

大西　一

先日思いがけず土方歳三ゆかりの地を訪ねる機会がありました。“えど友サークル”「江戸御府内八十八ヵ所をめぐる会」の例会でのことです。

当日は京王線新宿駅に集合し、世話人の松原良さんを先達に高幡不動駅乗り換え・多摩動物公園駅で降り、動物公園の右隣にある長楽寺にまず参拝。長楽寺は元和6年(1620)に創建され、もとは新宿の角筈にあったものが昭和34年(1959)にこの場所に移ったとのことです。お寺は高台にあり、上り坂にはまだ雪が残っていました。参拝・集印のあと、さらに登ったところにある観音霊場にも参りました。今回は場所の関係から、「めぐるお寺」はこの1ヵ所だけなので、オプションとして土方歳三ゆかりの各所を訪ねるという企画だったのです。

土方歳三義豊は、新選組の副長として隊長の近藤勇をたすけて幕末に活躍した、みなさんご承知の武士です。最近ではNHKの大河ドラマ「新選組」で山本耕史が鬼の副長・土方歳三を演じ、いま若い人たちに人気のある人物となっています。

まず初めに多摩モノレールの万願寺駅で降り、歩いて5分ほどのところにある「土方歳三資料館」に行きました。ここは現在日野市石田町ですが、江戸時代は武州石田村と呼ばれた土方歳三の生地です。館内には土方歳三の遺品が展示され、武士道を貫徹した軌跡が見てとれました。若い人たちが多く観覧していましたが、これもテレビのせいでしょうか。また、土方歳三は号を豊玉と称し俳句をたしなんでいたそうで、41句が展示されていました。その中の1句が恋のうたで、意外な一面を知った次第です。館内には、歳三の子孫である土方陽子館長のお姿も見えました。

次に、資料館から約5分の稲荷森に行きました。この森は土方一族11名によりまつられた稲荷神社の跡で、この後方が土方歳三の生家跡とのこと。歳三が12歳のとき多摩川の出水で今の場所（資料館のところ）に移ったそうです。

つづいて、すぐ近くの石田寺を訪れました。石田寺は歳三の墓所ですが、墓地の一角は土方の名の墓石ばかりで土方がこの地の有力な一族であったことを物語っています。当然そのなかに土方歳三の墓もありました。また、モノレールの駅から石田寺まで歩いた途中の大きな家には、すべて土方の表札がかかっていて現在でも変わらぬ状況を知りました。

このあと、モノレールで高幡不動駅に戻り、駅近くの高幡不動尊を参拝。高幡不動は立派なお寺で、日曜日のた

めか大勢の参拝客で賑わっていました。駅から寺院まで門前町がつづき、商魂たくましく「土方うどん」ののぼりを立てている店もありました。また、寺の境内には大きな土方歳三の銅像があり、この日野の地が土方歳三のふるさとであり、新選組の源泉であることを感じました。最後に土方歳三をしのんで拙句を一つ。

“土方の句のこる里や白椿”

江戸時代の八丈島と流人

大野晴美

「遠島」の準備　「不届き至極なれども、罪一等を減じ遠島を申し付ける」と、奉行が言い渡す場面は、テレビでおなじみですが、彼がいつ・どこの島へ・何年間流されるのか、告げられることはありません。それもそのはず、期日も場所も江戸を出帆する前日まで当人には知らされなかったのですから。また刑期も定められておらず、島で赦免の日を待ち暮らすのみでした。

ところで出帆の日が決まると、江戸の身寄りには前もって奉行所から知らせがあり、旅立ちの届け物を許しました。届け物は１人につき米20俵(１俵は約60kg）まで、他に麦５俵まで。銭は20貫文、金は20両まで。刃物、火道具、書物は禁じられましたが、衣類そのほか制限はありませんでした。身寄り・縁者に財力があれば、その後も奉行所を通して年に２回の便船で物資を送ってもらうことができました。

届け物のない者には、奉行所からお手当金が与えられました。雑人は金２分（0.5両)、揚屋者（お目見え以下の武士、僧侶など）は金１両、揚屋座敷者（お目見え以上の武士）は金２両でした。

どんな罪で流されたか　流罪は死刑から罪一等を免じたものですが重罪です。どんな罪状の者が流されたのか吉宗が整備した「御定書百箇条」から一部拾い出してみると、＊隠し鉄砲所持、＊幼女に不義をして怪我をさせた者、＊不受布施(日蓮宗の一派)類の法を勧めた者、＊ばくち打ち胴元、＊武士の屋敷でばくちをした者、＊人殺しを手伝った者、＊非分のない実子・養子を殺した親、＊相手から不法の儀を仕掛けられ是非なく人を殺した者、＊口論のうえ人を傷つけ不具にさせた者、＊弓鉄砲で誤って人を殺した者、などが見られます。だが実際には、政治犯や思想犯、当人は無罪でも連座で流されたり、寛政の頃(1789～1800)になると、無宿ということだけで流された者も多かったようです。

島での暮らしは勝手次第　島での暮らしは「流人の勝手次第」でしたが、医者など特別の技術のある者を除けば、武士も雑人も島民の手伝いなどして食べ物を入手するほかなく、それはかなりの難事でした。飢饉ともなれば真っ先に飢えに直面したのは流人でした。しかし、牢獄につながれ自由を失うことに比べれば、罪人にとってなんと人間的な刑罰だったことか。

一方、受け入れる島にとっては迷惑この上もなく、今では罪人を野放しにすることなど考えられません。「遠島」刑が成立するにはいろいろな条件がいりますが、まずは人を信じられる時代だったからこそ可能だったのではないだろうか。流人は情報や文化の伝達者でもあり、他島ではわかりませんが、八丈島では流人をそれほど嫌がっていたふうには見えません。人口増加を抑えるため、流人と島の女性の結婚を禁じるお触れが何度も出ていますが、あってなきがごとくだったといわれていることからも、それはうかがえます。実際、島抜けを除けば流人の凶悪事件はごく少なかったようです。

宇喜田秀家と加賀前田家　八丈島で流人の第１号は、よく知られているように関が原の戦いで敗軍の将となった宇喜多秀家でした。慶長11年(1606)、秀家は息子２人と従者10人を連れて来島しましたが、流人は妻を連れて来ることはできません。宇喜多の妻は前田利家の娘で、秀吉の養女となった豪姫です。豪姫の遺言で加賀藩前田家は、「隔年、白米七十俵、金子三十五両、衣類、雑具、薬品まで」宇喜多家に送り続けたと、『八丈実記』は伝えています。100万石の加賀藩にとって微々たる物とはいえ、それが260年間にわたって続いたという途方もない時代の律儀さに私は感動するのです。

流罪は１代限りでしたが、宇喜多の場合は子々孫々、明治維新まで赦免はありませんでした。前田家は赦免の際も請人となって宇喜多一族が江戸に戻るのを助けたといわれます。彼らを板橋の下屋敷に迎え入れており、今も板橋には宇喜多(浮田)姓の家が見られます。

参考図書：『八丈実記』『遠島』ほか

ご先祖さん探訪ツアー

野坂紘子

安房には強い風が吹いていて肌寒く、それでも日の光はきらめき春の訪れを告げている。そんなある日妹と千葉館山駅に降りたった。明治12年(1879)千葉師範の教授をしていたひいじいさんの安民が、大戸の大円寺に石碑を建てているのだという。

タクシーで大円寺に着くと、トタン屋根のきわめて小さな無住の寺で、質素だが中はこざっぱりと片付けられ、大事に使われているらしい。まわりは畑で、小高い場所の入口の右にその碑は立っていた。予想どおり周りはボロボロで、碑そのものはこけむしている。しかし予想よりは大きい。建てられた頃はかなり立派だったろう。お寺もその頃はもう少しきれいだったかも。でもなつかしい優しいような感じがあたりにただよっている。篆額部分は勝海舟さんが書かれたというので、誰かに読んでもらわねばと意気込んでいたのだが、単に山下楽山先生之碑という

だけのことで拍子抜けした。冒頭部分に正四位勝安芳題額と確かに書かれていて、ミーハーにはうれしい。帰ったら海舟さんの本でも読もう。どんな関係があったのか良く分からないが安民さんが海舟さんを尊敬していたのは間違いない。楽山・山下玄寿は40歳で亡くなっている。安民は父を慕ってこの碑を建てたらしい。読めるとこもあるのだが、私の読解力ではむずかしい。文は元長尾藩士で日知館漢字師範石井述、端正な書は司法省官僚の邨岡良弼、後に『大日本地理志料』を編さんしている方だそうだ。ちなみに石工は東京の井亀と書かれている。明治・大正期にはこのような記念碑を立てることが流行していたのだという。しばらく写真を撮ったりして館山駅に戻った。

ついでに館山市立博物館で「村の医者どん」という、安房の江戸・明治・大正のお医者達の事績をたどる企画展をやっていたので、ちょっと寄ってみた。博物館に着くと、「村の医者どん」達の中に楽山さんの父、玄門の著書が3冊展示されていた。説明のパネルには今訪れたばかりの大戸の碑、下滝田の玄門の墓の写真も掲示されていた。『医事叢談』、『養生新語』、どちらも予防医学の著書で、その1頁に黒い羽織、頭を丸めた晩年の玄門さんの肖像がのっている。なあんと私はご先祖さんにお会いしてしまったのだ。優しい理知的な肖像の多いなか、わが玄門さんはなかなかふてぶてしい面構えで、小鼻の張ったところは心なしか亡くなった母に似ているような気もする。その頁の最後の所、「左にざれうた　身を落とす穴は野でなし山でなし鼻と臍とのした御用心　老雲写」とか壮年の方に節制をうながしている。嘉永3年(1850)ペリー来航の3年前に出された『養生新語』は大正6年版の書物に引用されていて、「飯は粗食をよしとし、躰は勤労をよしとす」しかしお米は古米ではなく新米を食べろとか、立派な物でも時期はずれはさけ季節の

▲館山市立博物館の展示

ものを食べろ、鳥魚食べて良し、肉食は土地の風習に従え、薬喰いなら良しとか、病のうち8割はほっといても治るとか、かなり面白い。薬はあまり飲むな、高ければ良いというものじゃないとか、もうかるのか？　と思ったけれど、医は仁術を実践して慕われたと説明があり、良かったですねとほっとする。隠居後に江戸で館山藩の侍医となり84歳でなくなっている。良く働いたご先祖さんでもあるらしい。すごく感激の館山旅行だった。

オタクから見た江戸

小松美幸

2月某日。江戸東京博物館で北斎漫画展を見た帰り、ふと思い立ち横網町公園へ足を向けた。園内に建つ東京都慰霊堂と復興記念館に参詣するためだ。

関東大震災の発生は9月だが、前月の17日に地元の神戸で神戸淡路大震災合同慰霊会に参列したばかりの私にとっては今の時期、同じ痛みを共有する人々の御霊が祭られたこの地には格別の思いがつのる。

そんな復興記念館から歩いて数分のところに江戸博があることを知ったのは、友人の岡橋園子さんから「歴史や江戸時代に興味があるならぜひ見てみなさい」と勧めていただいたのがきっかけだった。

江戸とくれば時代劇…八百八町を翔る剣豪忍者に捕物帳と、思い浮かべるだけで心が弾む。館内では、当時のまま復元された芝居小屋や絵草紙などマニア垂ぜんの貴重な展示物も拝めるとあって、初日はアキバ系の仲間にも声をかけ、リュックを背に両国へと繰り出した。

神戸の下町に生まれ育った私は、物心ついた頃から貸本屋が遊び場だった。実家の近くには全国に先駆けて保証金なしの貸本チェーンを展開したネオ書房をはじめ数軒の貸本屋がのきをつらね、児童向けの新刊書や漫画本を安価で借りることができた。当時の貸本漫画の主流は時代もので、侍や忍者はわれわれのヒーローだった。個人的には「八犬伝」や「児雷也」が好きで、チャンバラごっこのさいにはガマに乗って空を飛ぶ「忍法」も試みたりしたものだが、それら一連の原作が江戸期の読本や合巻から出たと知ったのは大人になってからだ。ゲーム世代といわれる今の若者には想像しにくいかもしれない。だが、我々の育ってきた一時期そこには確かに「江戸」があった。道で拾った棒切れを刀にみたてて腰にさし、ぼろになった風呂敷を頭巾のごとく頭にまいて路地を駆けた日のことを、私は今でも鮮明に覚えている。貧しい時代ではあったが、子供が遊ぶ空き地はいっぱいあった。拙者、おぬし等、私たちは貸本漫画で覚えた武士言葉をつかって捕物ごっこに熱中した。娯楽の舞台はその後 貸本から映像へと移ったが、我々の憧れた主人公たちはテレビや映画、ファミコンの中でしっかりと生き続け、今なお夢と興奮を与えてくれている。約200年前、辻の貸本屋におかれた黄表紙や読本に多くの挿絵を描き、のちに世界的な画家として名を馳せた葛飾北斎もまた、江戸の庶民たちに限りない夢を提供したヒーローだったのだろうと、そんなことを考えながら横網町公園をあとにした。

落語で

江戸散歩…②

[堀の内]

数年前まで妙法寺門前にあったお店

和歌の「歌枕」になぞらえ、落語の舞台やゆかりの場所を「噺枕（はなし）」と名づけて、そこら辺りをヨタヨタうろついてみようと思いたったところ、さっそく親切かつ厳しいご指摘がありました。そもそも落語では本題前の小咄（こばなし）が「枕」であり、類似語は紛らわしく違和感があるとのことです。やはり「噺枕」なんぞという軽薄な造語は無理がありそうです。

今回の噺は『堀の内』

神田に住むとびっきりそそっかしい男、する事なすことハチャメチャで「オイおっかぁ、てぇへんだ足が片っぽ短くなっちゃった。薬呼んでこい、医者飲むから」とのっけから騒ぎまくります。とにかくたんすの引き出しで顔を洗おうとしたり、ザルに水を汲んだり、手ぬぐいとまちがえて猫で顔を拭き引っかかれるはと、おっちょこちょいの限りを尽くします。いまなら病名がつくだろうと思われるほどのつわものです。いわば粗忽（そこつ）界（そんな界あるか！）のグランドチャンピオン。「おマイさんも落ち着いてさえいれば一人前なんだから…」とヘンな励まされ方をされながら、それならばそそっかしいのを直してもらいてェてんで、信心をすることにしてさっそく堀の内の御祖師様に早朝から出かけることにします。ところが逆方向の東へ行くやら目的地を忘れるやら、両国から浅草を経由してまた自分の町内へ戻ってき、遠まわりの末にようやく四谷から鍋屋横丁を通って、堀の内へたどり着きました。妙法寺ではさい銭箱に財布ごとほうりこみ、お堂の回廊で弁当を開けようとしたら、それは枕をカミさんの腰巻で包んだもので「ちょっとアンタ変なもの開けられちゃ困りますね」としかられる始末。そんなデタラメぶりといっても、信心のためとは言いながら「ご利益があるように乗物には乗らない」と誓って、およそ30キロ以上を歩ききった大変な健脚です。落語のほうは筋らしい筋もないままに、ドジとマヌケばなしが立てつづけで爆笑の連続です。ところでこの噺は江戸風物ではなく、電柱に道を尋ねたり、線路を見て恐ろしく長い帯だと間違ったりしてますので、時代背景としては大正時代初めの頃でしょうか。息子の金坊を湯屋へ連れてゆき、そこでの失敗とドタバタぶりはまさに呵々（かか）大笑、ひたすら可笑（おか）しい限りです。

▲鍋屋横丁にある案内板

散歩は端折って

噺どおりは長丁場でとても一日では歩ききれません。そこで安直ながら散歩の出発は新宿からということで。駅からは広い道を歩くのですこし退屈ですが、青梅街道を西へ行きます。成子から淀橋を渡り中野坂上をこえて数十分で鍋屋横丁へ。途中に「象小屋跡」という広場があったのでちょっと寄り道して…落語とは関係ないからわざわざ言うこともないか。青梅街道を妙法寺へ左折する角が鍋屋横丁です。元禄の頃からこの辺りは、厄除け祖師の人気が高まって、参詣客が群れをなすようになり、それを当てこんだ商店や茶屋が立ちならんでいた所だそうです。中でも「鍋屋」はひときわ繁盛し、名物の草餅と庭の梅林が評判でした。梅林でウグイスも「法華経」と唱えたとのこと、うーん今日にふさわしいネタだね。太田蜀山人が文化の頃「中野村内はし場俗になべや横丁」（堀の内妙法寺記）という写生を描いていることが、「鍋横道しるべ」という金属板に記されています。

▲厄除けの妙法寺祖師堂

妙法寺でちょっと当惑

鍋屋横丁から噺のままに参道「妙法寺道」が今もあります。道の雰囲気には全くそれらしい面影が残っていませんが、上り下りも多少ありうねうねと続いています。歩くことほぼ30分で堀の内に達しました。環状8号線に面した日圓山妙法寺、格式も由緒もある立派なお寺で、日蓮大士の霊像があります。厄除けの御影として今でも、参詣人引きもきらずという名刹です。

その入口には大層見事な石の道標があり「是より堀之内江十八丁十間」明治11年(1878)に建てられた、との銘があります。かつて鍋屋横町の角にあった石柱です。粗忽男もたぶん目にしただろうと思われます。でも道標てぇのは四辻や分岐にあって、道行く人に目的地を案内するもので、それがなぜか目的地に建っているてぇのも、マヌケな話じゃないですか。よほどのっぴきならない事情でここへ移設させたのでしょうが、これがもし元の場所にあったらどんなにか楽しいだろうと感じました。

▲立派でも役に立たない悲劇の道標

【取材】 文・写真：広報部会・稲垣武志
イラスト：同・松原良

催事案内

古文書講座

「入門A」[入門P」「初級」「中級」とも5月から開講

◆**入門編**　講師：小松賢司さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：第1回　5月14日(水)A講座およびP講座
  第2回　6月4日(水)A講座およびP講座
  第3回　7月2日(水)A講座およびP講座
- 時間：A講座は10:30～12:30
  P講座は14:00～16:00

◆**初級編**　講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：第1回　5月21日(水)14:00～16:00
  第2回　6月18日(水)14:00～16:00
  第3回　7月16日(水)14:00～16:00

◆**中級編**　講師：小宮山敏和さん(徳川林政史研究所)
- 開催日：第1回　5月17日(土)14:00～16:00
  第2回　6月21日(土)14:00～16:00
  第3回　7月19日(土)14:00～16:00
- 会場：各講座とも江戸博1階会議室
- 定員：各講座とも80人(会員のみ)
- 参加費：各講座とも3回1,500円(初回一括払い)
- 申込締切：各講座とも申込は締切りました。

【企画担当責任者】上田太一(事業部会)

友の会セミナー

第67回「幕臣から見た天狗党」

講師　岩崎信夫さん(小学館アカデミー古文書塾講師)

◆元治元年(1864)春、水戸藩尊攘派は、攘夷決行を幕府に迫るべく決起します。世にいう天狗党事件です。しかし辛苦の遠征の果てに、頼りとした慶喜の助力は得られず、越前敦賀で刑に処せられます。天狗党といえば、行動の急進性とともに集団の純粋性、悲劇性などの印象が際立って感じられます。その理由の一つは峻烈な幕府の対応にあるのではないでしょうか。それは何故だったのか、幕府方からみれば天狗党とは何だったか、追討軍に加わった幕臣武嶋金三郎の文書などからその辺りを探り、ことに事件最初期の幕府軍の動向に光を当ててお話していただきます。

○講師略歴：いわさき・のぶお
昭和17年(1942)東京都生まれ。東京教育大学文学部史学科卒業。都立高校教員を経て、現在小学館アカデミー古文書塾講師。静岡県裾野市史の編纂、目黒区守屋教育会館郷土資料室の武島家文書目録編纂などに参加。『武島家文書目録』解説執筆。

- 開催日：5月24日(土)　14:00～15:30
- 申込締切：5月13日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階会議室
- 定員：100名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

第68回「戦国時代の江戸城」

講師　齋藤慎一さん(江戸博学芸員)

◆太田道灌が築き、徳川家康が入城した江戸城の実態はどうだったのか、とても難しい問題です。ですが江戸博にとっても重要なテーマです。今回は、特別展「江戸城」や関連して開催されたシンポジウムを通して得られた成果などを踏まえて、戦国時代から江戸時代初頭までの江戸城の実像に迫っていただきます。

○講師略歴：さいとう・しんいち
昭和36年(1961)東京生まれ。明治大学文学部卒業。明治大学大学院博士後期課程中退。史学博士(明治大学)取得。主な著書に『中世東国の領域と城館』(吉川弘文館)『戦国時代の終焉・「北条の夢」と秀吉の天下統一』(中公新書1809)『中世武士の城』(歴史文化ライブラリー)など。

- 開催日：6月13日(金)　14:00～15:30
- 申込締切：6月3日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階会議室
- 定員：100名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

第69回「将軍を引きつけた遠山金四郎の裁判」

講師　南　和男さん(元駒沢大学大学院教授・文学博士)

◆裁判の真っ最中、桜吹雪の入墨を見せて大見えを切るので有名な遠山の金さんは、実在していました。本名を遠山景元といい、裁判上手で町奉行所内でも、大岡以来の名奉行という評価を得ていました。また本人も裁判が好きで、得意でもあったようです。ある公事上聴(将軍(世子)の眼前で行う一種の公開裁判)のおり、遠山は吉原の遊女を18人も呼び出して、人々の話題をさらいました。将軍家慶さえも御簾(みす)のかげから、身をのり出して興味深く見守ったといわれています。こうした遠山の裁判の数々や、当時裁判上手で遠山に引けを取らなかった与力東條八太夫の迷宮入り寸前の事件解決の経緯などもお話していただきます。

○講師略歴：みなみ・かずお
昭和2年(1927)生まれ。国学院大学文学部史学科卒業。東京都立航空工業高等専門学校教授を経て、駒沢大学大学院教授(平成10年定年退職)。著書は『幕末江戸社会の研究』『江戸の町奉行』(以上、吉川弘文館)『江戸の社会構造』『幕末江戸の文化』(以上、塙書房)など多数。

- 開催日：6月28日(土)　14:00～15:30
- 申込締切：6月17日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階会議室
- 定員：100名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

見学会

「深川の史跡―その２」

◆深川南部、すなわち江戸時代の海辺に沿って史跡を巡ります。深川は埋め立てで広がっていきましたが、江戸後期は現在の地下鉄東西線あたりが海岸線でした。それを示す洲崎神社、波除碑などを訪ねた後、江戸庶民に人気の富岡八幡宮やその別当寺であった永代寺の跡などを巡り歩きます。解散は15時半ごろ(帰りの最寄駅は東京メトロの「門前仲町駅」)となります。

- 開催日：5月31日(土)12時45分集合。ただし、時間前でも集まり次第順次出発します。
- 集合場所：東京メトロ東西線「木場駅」（1a出口）
- 申込締切：5月20日(火)必着
- 定員：100名　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)、申し込み多数の場合は抽選することもあります。
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】下永博道(事業部会)

「向島の史跡探訪」

◆墨田区向島地区は、江戸期には大店の旦那の隠居所としてまた隅田川沿いは桜の名所として江戸人の行楽の地でしたが、明治・大正期には文人墨客が多く住み、その後戦災を免れた地域が多く下町情緒が残る東京でも数少ない地域です。今回はその古き下町を歩き、向島百花園、白髭神社、長命寺、弘福寺、三囲神社、すみだ文化資料館、牛嶋神社などを巡ります。解散は都営地下鉄浅草線「本所吾妻橋駅」。

- 開催日：6月29日(日)12時45分集合。ただし、時間前でも集まり次第順次出発します。
- 集合場所：東武伊勢崎線東向島駅(改札口付近)
- 申込締切：6月17日(火)必着
- 定員：100名　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)、申し込み多数の場合は抽選することもあります。
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】岩松精(事業部会)

会員優待のお知らせ

好評開催中！

●江戸東京博物館開館15周年記念特別展
「ペリー＆ハリス」
～泰平の眠りを覚ました男たち～

会　期　2008年4月26日(土)～6月22日(日)
休館日：毎週月曜日、5月7日
　　※ただし、5月5・12・19日は開館
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円

次回予告

●江戸東京博物館開館15周年記念特別展
「北京故宮　書の名宝展」

会　期　2008年7月15日(火)～9月15日(月・祝)
休館日：毎週月曜日、7月22日
※ただし、7月21日、9月15日は開館
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円

企画展と特集展のご案内

●企画展　熱き心展～寛斎元気主義～
開催期間　2008年4月15日(火)～7月6日(日)
会　　場　5階常設展示室内　第2企画展示室

●特集展
江戸の華～火消しと祭り～
開催期間　2008年3月27日(木)～7月6日(日)
会　　場　6階常設展示室

●次回企画展
発掘された日本列島2008
～高松塚古墳・世界遺産石見銀山・新発見考古速報(仮称)～
開催期間　2008年7月19日(土)～8月31日(日)
会　　場　5階常設展示室内　第2企画展示室

お申込方法

◆普通はがきに、①催事名・開催日、②会員番号、③氏名（同伴者連記）を明記して下記の「友の会事務局」へ。**「往復はがき」の必要はありません。**
なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。
◆締切：各催事の案内をご覧ください。
◆申込は、各催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。
◆申込先：**〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1**
江戸東京博物館友の会事務局

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も友の会事務局と明記ください。お間違いなく！**
＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**水曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いいたします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報＜えど友＞第43号
平成20年5月1日発行（奇数月1日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長：松原良　副編集長：菅沼和男　　発行人：玉木達二(会長)
編集人：岡橋園子、佐藤幸彦、大野晴美、稲垣武志、岡田守弘
　　岡本静雄、深尾恵美子、福島信一、清宮寿朗、小松美幸
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1　電話03-3626-9910